

第2回「民族共生の象徴となる空間」における民族共生公園（仮称）基本構想検討会 議事概要

■日 時：平成26年11月11日（火）10:00～12:00

■場 所：札幌第1合同庁舎2F講堂

■出席委員（五十音順、敬称略）

愛甲哲也、浅川昭一郎、内田祐一、加藤忠、坂井文、佐々木利和、戸田安彦、野本正博、吉田恵介

■議事要旨

民族共生公園（仮称）を含む空間について、自然、民族、時間等との共生やアイヌ文化を理解できる場の在り方等、幅広い意見交換がなされた。

【基本構想の検討について】

- 民族共生公園の基本構想検討にあたって、ポント沼、自然休養林を民族共生公園に含めるかは別として、互いの有効利用に資するという観点を考えながら議論してほしい。
- ポロト湖は、狩猟や文化活動の拠点として伝承されてきており、ポロトという名称が継承されるような公園となるように配慮した検討をして頂きたい。
- ポロト湖・ポント沼は、象徴空間において重要な役割を持っている。周辺の国有林、道有林をどのように活用して象徴空間のエリアを考えるかが重要。

【民族共生公園(仮称)の基本構想に盛り込むべき要素の具体について】

〈1日の暮らしや四季で、アイヌ方々の時間のとらえ方、文化、知識について〉

- 自然と民族と時間は、海と山と川とあわせて、食文化であり、体験だと思っている。海、山、川とあわせて、食文化も体験もつながる公園としたい。
- ポロト湖は、海と山と森をつなげている湖なので、そこに上ってくる鮭やシシャモ等生態系のことも配慮しながら公園の整備をすべき。
- 時間の捉え方は、先住民族として公園の中に伝統的なコタンを再現するということがひとつの歴史であり、先住民側からコタンの歴史をどう映し出すかが大きな課題であると考えている。
- アイヌ民族博物館にあるコタンは観光面から大きめに作られており、それが伝統的なものであるという誤解を招くことは避けたい。
- アイヌが伝統的な時代、伝統的な時間として意識している歴史を象徴空間の中で表していく中で、民族の共生を図っていくことが必要。
- 自然からの贈りものを大切にする、環境を大切にする、人間も自然の一部であるという考え方が、アイヌ民族を理解するには重要。
- この公園は、実際にアイヌ文化を体験・体感することにより深く理解できるという観点で、先住民族の土地に公共空地を整備する新たな取り組みとなることを期待する。ポロト湖とつながる山、川、海も含めて先住民族の土地ということ意識することで、他の文化、民族を理解するという象徴空間本来の理念につながることを期待する。
- 時間との共生は、コタンなどの景観をどこから眺めるかという観点が重要。
- アイヌの人たちと和入という二つの民族を理解する場をどのようにするか。「送り」の儀式や鮭の

匂い等、まさに現代人から差別対象とされてきたそのものをどのように理解する場とするのが課題と考える。

- ヨコスト湿原は共生公園には入らないが、関連施設として周辺の海、山、川と合わせて活かしていけるよう考慮したい。
- 時間との共生は、歴史や未来を含めた広い概念として捉えた方がよい。
- 基本構想を検討する際には、アイヌ以外の人たちの視点だけではなく、各地域のアイヌの方々の意見が反映される形をとっていくことが重要。
- チセは各地域の特徴がある。そういったものを取り入れることが考えられる。白老のものや旭川のものなど、地域性のあるものが配置されているということが必要なのではないか。
- アイヌ文化は衣食住そのものである。食べて、生きる行いは各地とも共通しており、衣食住と海、山、川が深く関わっている。
- 各地のアイヌ文化のうち共通する部分を、民族共生公園においてメインとして扱っていくことが重要ではないか。その上で、白老町の地域の特徴もある程度出していくべきではないか。
- 白老町に立地する以上は、地域の特徴もある程度は出していくべき。
- アイヌの方々が生態系の中で一緒に生きてゆくために時間をかけて積み上げてきたものを伝えていくことにより、中国や台湾の方がこの空間に来たときに自分たちの国にもそういった方々がいたことを思い出してもらうことが、共感であり、それが民族共生ということと考える。民族共生公園は、そのようなことを思い出して頂く空間であることが重要。
- 外部空間について、どのように自然を眺めてきたか、使ってきたかなどが理解できる空間として示すことができればよい。
- 対象地はランドスケープの中から切り取った限られた部分になるが、周辺の海、川、山と生態系としてつながっていることを見せる方法や体験のさせ方を可能な限り考えていく必要があると考える。
- 民族共生公園（仮称）は、地域全体で取り組まれるイオルの拠点となる空間という位置づけではないか。
- 駐車場やバックヤードなどをどうコンパクトにするかが重要。
- 広場に来た方々が、アイヌ文化の特徴や暮らしが理解できる空間構成ができれば、ここの場所になぜ民族共生公園がつけられたのかということが理解できるのではないか。
- コタン等の景観をゆったり眺めることのできる視点場は、造りこみすぎず、朝夕の湖の美しい景観が見えるところに余計なものをつくらないなどのポイントをしっかり押さえることが重要。
- ゾーニングは、駐車場と駅的位置でメインの入口が決まる。広場と周りをつなげる出入口をきちっと整備することが重要。また動線主体ではなく、暮らし方を想像できる建物の配置が重要。
- 白老町では町民全体で象徴空間への来訪者に対して、おもてなしをしようと考えている。どのように来訪者を迎え入れるか、こどもから大人までどういう交流ができるかがリピーターとなって頂くためには大事だと考えている。

〈公園空間について〉

- 敷地は鉄道と道路や湖に挟まれた狭いところから入っていかなければならないため、迎え入れる場所をうまく作っていくことが必要。敷地に入ったら、湖と山の景観を見て頂き、その脇にチセがあり、自然とアイヌの方々が共生してきた姿をすぐに理解できるような構成がいいのではないか。博

博物館はどちらかというところとしてほしい。すべてを一体に体験しにくることは考慮して欲しい。旅行者の滞在時間2～3時間の中で、何か印象付けることができれば、リピーターになってもらえるのではないか。

- 博物館をどこに置くのかが重要。視界を妨げず、景観も阻害せず、景色が良くて、アクセスが良いという場所としたい。
- 景観をどこから眺めるかというポイントを端的に来館者に示すことが重要。視点場はベストの場所を作ってあげることによって短時間でアイヌ文化を体感することができる。体験交流を考える中では広場とチセと植栽と湖の景観だけというのでは体験交流事業のニーズに対応できないのではと考えている。
- 象徴空間は一つのステージ、アイヌの人たちの文化伝承活動のステージであり、憩いの場、よりどころであり、児童には学ぶ場である。それには四季を通じて快適な施設が必要。
- 公園は、アイヌ文化の知識がない方にもアイヌ文化の入口として関心を持っていただく大事な部分である。公園空間について造り込みすぎると、後の世代の人たちが使いにくくなる。公園を利用される方が様々な使い方ができる仕組みをつくっておくことがよいのではないか。
- 未来に向けて共に育むという視点も重要と思うが、一度整備するという事も重要。既存のチセの有効活用とあるが、イオルで復元したチセは、2020年で活用するのは難しいと認識している。2020年に向けてはチセ、コタンを計画的に復元していくことが必要ではないか。
- アイヌ民博のチセは、滞留する施設ではなく展示施設という位置づけである。雪や寒さ、雨への対応とかかわることだが、将来的にアイヌ民博をどうするかも含めて博物館と体験交流ゾーンとの間に人を集める場が必要と考える。また、雨の日や冬の日にどのように移動するかというのは大きな課題である。
- 動線としては湖沿いに3つのエリアを最短でつなぐ動線が重要。博物館までの動線の延長が長くなると動きにくくなる。
- 既存のチセ（民博）は、本来のものとは違うのできちんと作り直さなければならない。他地域のチセの復元も行うのか。舞踊や育成する方々、体験はどこでやるのか一体的に考えなくてはいけない。
- 現在のチセがどの程度、利用できるのかや更新が必要なのかは技術的検討が必要。
- 公園という目的だけではなく、ナショナルセンターという位置づけもある。
- イオル再生事業で復元されたチセは、葺き替えや燻蒸等の維持管理を行っておらず、活用は難しいのではないか。

<他機能に関わる意見>

- ポロト湖や近くの川に鮭の稚魚を放流し、還ってきた鮭の漁を行うことにより、命の大切さなどを知ったり、自然休養林などの周囲の山でシカ猟や獣道を歩かせる等の体験を行うことも考えられる。
- 屋外からだけではなく、博物館（屋内）からコタンを眺めながら歴史を学べるという快適な空間も必要。
- 時間に関しては未来が重要であり、伝承を如何に行っていくかが問題である。
- アイヌ文化を来園者に伝えるための公園づくりは、ゾーニングされた狭い場所だけでは難しいため、道有林や国有林を活用しながら漁協などとも調整しつつ進めていくことも必要。
- 文化伝承できる場が必要。舞踊や体験、人材育成を行う場の確保が必要。
- アイヌ文化の芸能や解説などを博物館でできないのであれば、他の場所が必要である。
- 人が集まる中央広場ゾーンに、古式の舞踊や講堂的な役割を持った場が必要と考えている。

- 冬場の対策をどうするのか示してほしい。基本構想の中で組み込まないのであれば、いつ組み込むのか示してほしい。
- 象徴空間の整備に際し、アイヌ民族博物館をどのように取り扱うのかについて、国とアイヌ民族博物館で協議を早めに行うべき。

以 上